

# 自慢の祭

那古地区の中でも特に町域が狭く世帯数の少ない町内ですが、先人が残してくれた立派な屋台を大切にしながら伝統を引き継いでいます。祭礼時の役職は一人が何役もこなし、互いに助け合いながらほとんどの祭礼の運営を行っています。

小さな地区ならではの支えあい、まとまりのある祭礼が自慢の一つです。様々な困難を話し合いを重ねながら克服し、現在では日頃より交流のある近隣地区からも多くの方々が手伝いに来てくださり、準備から片付けまで大きな力となり、参加者全員があたかも地元のお祭りとして楽しみ、活躍できる環境を作り上げてきました。この取り組みは、ある意味これからの時代の「先進地区」ともいえるものでしょう。その信頼関係や絆など宿組としての祭りの在り方を良き形として継承していくことを大切にしています。



引き回しする宿の屋台

那古観音祭礼に出祭する他の五つの組の皆様も状況をよく理解してくださっており、協力していただいていることに感謝の念が堪えません。

那古観音祭礼の中では昔から「馬鹿囃子」や「三切り」は一切叩かず「しっちゃめん」「ぴつ」と「かまくら」のお囃子だけを貫き通す地区は宿組だけで、さらに、それらの大太鼓を下から叩くスタイルも珍しく、多くの叩き手が場を盛り上げてくれています。その音色が響いて来ることが「なごんまっち」の雰囲気を作っていて、無くてはならない町内だと言ってくれる方々も多く、とても嬉しく思っています。

屋台の引き廻しでは、梶棒の切れがよく、ほぼ九〇度まで曲がるので、広く場所を取らなくても三六〇度回転させることができます。自慢の屋台をあらゆる角度から皆さんに見ていただくことができるのも特徴の一つです。

また、昔からの半纏のデザインには手を入れず継承していることも自慢のひとつになっています。



継承される半纏模様

本祭の朝には木の棒に太鼓をつるし、皆で担いで歩きながらお囃子を奏でる「町内まわり」が那古地区の中で唯一行われています。これは道幅が狭く屋台の通れない場所が多いため、隅々までお囃子の音を届けたいという思いから行われ、住民への



太鼓を担いてまわる「町内回り」



下から叩く大太鼓

温かい思いに溢れています。特に高齢で祭礼に参加できない皆様は毎年、楽しみにしており、自宅より出てきて出迎えてくださる満面の笑顔は、これからの自慢の情景です。

宵祭の夕方や本祭のクライマックス那古寺境内への入祭時には「かまくら」に合わせた「狐の踊り」も十数年前から取り入れ始め、見どころの一つとなっています。楽しみにしてくる方々も増える中、継承していきたい新しい伝統を生んでいます。那古観音祭礼で年番に最初に手古舞を始めたのも宿組で、これも良き伝統として続いてくれればと願っています。

屋台の前面には毎年樽酒が鎮座しており、すれ違う他地区の引手や観客にまで升でふるまわれる樽酒は名物となり、毎年これを楽しみにしている人も多々います。その他にもこだわりとして、飲料は前日の準備で氷詰めにしてしっかりと冷やす、食事にも趣向を凝らすなどおもてなしには一切の妥協がありません。

年番渡しを終えた屋台が町内に戻ると、お囃子は「かまくら」に変わり老若男女、皆が綱につき、ゆっくりと祭りの名残りを惜しむように最後の町内まわりが行われます。

町内の人々や参加者全員が、まるで一つの家族になったように屋台を引き廻すその風情は、まさに宿組らしく、心に深く刻まれる何とも優しく温かな自慢の祭りです。

## 那古観音祭礼

例祭日は七月十七日(宵祭)と十八日(本祭)で、十八日に祭典が執り行われ、山車・屋台の引き廻しは、直近の土・日に行われます。日程は六地区代表による総代会議で決定されます。古くは各町独自で行っていた祭りを明治三十年より那古観音の縁日に合わせ東藤、大芝、芝崎、浜の四町合同の祭りとなり、その後、寺・宿・宿が加盟し今日の形になりました。那古祭礼規約に基づき、一年交代の年番組が祭礼の運営を取り仕切り、本祭は六町の山車・屋台がそろっての合同引き廻しが行われます。

各地区とも赤を基調とした提灯、高覧幕はメ縄に三連の細縄と五折の御幣とお揃いのデザインが那古地区の一体となった演出美を感じます。

この祭礼の大きな見どころは、それぞれの組の華麗なバチ捌きによる大太鼓の競い合いと、祭礼を締めくくる伝統の「締めことば」による「年番渡し」です。



那古寺本堂前での年番渡し



令和5年 年番・宿組

このパンフレットは、地域の方々からの聞き取りを中心に、文献・史料からの情報を加えて編集しています。掲載内容へのご指摘やご意見等をぜひご教示賜りたくお願いいたします。